大和当帰

良品は生産者育成から

増血・血流に効果的

当帰の中で最も優れた品質を誇る「大和当帰」。【鹿児島県立薬草の森】

奈良県にあるP製薬の会長が、時折拙宅を訪れる。奈良は昔よりこぢんまりとした製薬会社の多い所。いろいろな漢方原料の生薬を採集、調整してきた歴史に由来するものだろう。

会長は「最近、大和当帰（やまととうき）を生産する農家が少なくなって、三軒ぐらいになりました。なんとかこの伝統を引き継いで残したいものだと努力していますよ」と語った。

セリ科当帰のもっとも優れた品質の物が、大和産（奈良県）の大和当帰である。「潟当帰」といって、大和産の苗を新潟で育てた物がこれに次ぐ。さらに北海当帰、すなわち北海道産がこの次。大和当帰は、ごく少量しか生産されないが、筆者はこれを使わせていただいている。

大和当帰を栽培しているある農家では、一年生の苗を山のなだらかな傾斜地にすじ植えする。「芽くり」といって中心部の芽をくり抜いて植える。夏場はヨトウ虫、アブラ虫、キアゲハの幼虫が多量発生する。そのころは殺虫剤を用いずに「煙でいぶす」のだという。

山間部は夏でも温度が下がる。山肌に秋気を感じる一瞬、空気の流れが止まる。冷たい空気の層が、地表のすぐ上まで降ってきて動かない。その一瞬のころ合いを見て山すそで枯れ草やミカンの皮を燃やすのである。煙は地表をはうように山肌をぬっていき、薫蒸（くんじょう）による殺虫を行う。だから、傾斜地でないといけないというわけだ。自然との調和がいかに大事かという問いかけが分かる。

年末になり、空っ風の吹くころに掘り起こし、はざがけにして乾燥させる。次は「湯もみ」といって七〇度のお湯につける。そうすると、六〇度に温度が下がる。そこで、干し大根をもむように一本一本もんで洗う。この過程をへると、良質当帰の甘い香りが出る。

当帰は、増血や血流をよくする作用があるので、基本は温性の駆瘀血（くおけつ）薬、鎮痛薬になる。そこで生理痛や生理不順、月経困難、腰痛、身体疼痛（とうつう）、更年期の諸症状などに用いる。本欄でもしばしば紹介された処方の主薬でもある。

有機農業の生産物がそうであるように、良質のものは少々高くついてもみんなで求め、投資して、生産者を育てなければ、いつかは「ツケ」が消費者に回ってくるのではないか。